

式 正英先生のご退官に当たって

井 内 昇

式先生には、平成4年3月末をもってめでたく停年退官されることになった。昭和34年5月のご着任以来、約33年にわたって地理学教室の発展に全力投球された先生の存在感の大きさを思う時、先生が去られた教室を想像することは難しい。

先生の学界における業績、ご活躍については別のページに譲るが、先生の場合特に注目されるのは、その研究関心領域の広さであろう。氷河地形学を専門として出発された先生は、その後次第に地理学全般に関心を広げられ、晩年は教室の地誌学講座教授として日本地誌学研究に全力を投入された。学術研究での成果に加え、テキスト、啓蒙書等の執筆にも精力的に取り組み、その著書の中の幾つかは現在も版を重ねている。現代の地理学者の中では数少ないオールラウンドプレイヤーと申し上げてよかろう。

33年の教室でのご活躍も多岐にわたるが、大別すれば次の3つに分けることができよう。

まず最初に挙げなければならないのは、初代主任教授飯本先生に発する教育・研究の伝統に一層の磨きをかけられたことである。戦後、地理学の発展はめざましいが、別の角度からみれば外国の新しいアイデアの輸入でもあった。そのような風潮の中で、先生は頑固に戦前からの伝統的な地理学の正統性を主張して来られた。地球規模での環境破壊が進む中で、この地理学の伝統的な主題が見直されているが、新しい流れを熟知しながら、一貫して自己の地理学観を貫いてこられた先生の姿勢は貴重なものである。

次に挙げたいのは、教室という狭い枠を超えた学内・学外での先生の縦横のご活躍である。昭和50年代に学内で推されて学部長をはじめ数々の要職を歴任され、さらに60年代には附属高校長として女子高校教育の向上に努められた。学外にあっては、昭和55年のIGCで先生が組織委員会委員、同展示委員会委員長に就任されたことから、お茶大地理学教室が事実上国内、国際、国際技術の3展示会開催責任校となった。この展示会が大成功を収めたことから、組織委員会はお茶大スタッフの労を多として、大会終了後、国内国外から集まった国内・国際展示会展示品のすべてを本教室に寄贈する決定を下し、大学当局もこれに応じてとくに1室を地理学科に提供することになった。この結果、貴重な内外の最新の地理関係資料のすべてが現在712号室にまとめて保管され、完備したカタログを備え利用に供されている。

最後に挙げたいのは、昭和57年に発足したお茶の水地理学会設立を頂点とする一連のご活躍である。学会設立の母体となったのは、先生の発案で昭和48年にスタートしたお茶の水地理談話会で、さらに、昭和34年に渡辺光先生の発意で教室活動の紹介・連絡誌として第1号が刊行された雑誌「お茶の水地理」を学会の機関紙として位置づけると共に、卒業生の生涯教育を担う組織としての性格も加えた学会設立を実現させたことは、教室と卒業生の一体化を図るうえで画期的なことであった。学会発足後すでに10年を経過し、談話会・見学会の開催、「お茶の水地理」、ニューズレターの刊行等会員の拠出する会費で運営できるようになった。ただ今から10年前には年5回開催されていた談話会が年1回にとどまり、学会誌やニューズレターへの投稿・寄稿数とも決して多いとはいえない。教室としても式先生が残されたこの組織を維持しさらに充実させたいと希望しているが、そのためにも学会の中心となる会員の皆さんが積極的に参加、利用されることが式先生の願いであろう。